

文化活動におけるオーラル・ヒストリーの実践的研究

— 「郡上踊」におけるオーラル・ヒストリー手法の技術的考察 —

A practical study of oral history in an activity

*1 *2 *3 *4

久田 由莉／久世 均／林 知代／松野 光暢

デジタル・アーカイブズにはいくつかの記録方法が考えられるが、文化財や文化活動の様子・所作を正しく記録し、後世に残すことが重要である。そこで今回、文化活動の記録方法として、オーラル・ヒストリーによって国の重要無形民俗文化財「郡上踊」の伝承技術を記録し、更にそれらの情報を用いて“知”の伝承サイクルの確立のための総合的なデジタル・アーカイブズの開発について試行研究したので報告する。

<キーワード>

デジタル・アーカイブ、多視点同時撮影、記録、文化活動、共同利用

1. はじめに

あらゆる文化の基礎は、地域の伝統文化にあり、われわれはこれらの伝統の先端にあって、その伝統文化を同時代性でもって創造していくことが、文化の創造であると考えている。来るべき「成熟した時代」の日本文化を支えるものがこの伝統文化であるが、今日適切な手が打たれぬまま、それらが失われようとしている。

これらの文化に対する理解が本研究の基本である。そしてこの状態に際して、何らかの手を打つことが求められている。

ここでは、このような地域の伝統文化に関する“知”の伝承サイクルを支援するためのオーラル・ヒストリー手法の技術的考察を「郡上踊」を例にして研究をしたので報告する。

2. オーラル・ヒストリー

「オーラル・ヒストリー (oral history)」とは、この分野における第一人者として知られるエセックス大学のポール・トンプソンによると、これを「記憶を歴史にする」ことであると定義している。また、中国・台湾にお

いては一般にこれを「口述歴史」と表現している。すなわち、「オーラル・ヒストリー」とはある個人にその体験を口述してもらい、これを記録、分析する一連の作業を総称することといえる。

この「郡上踊」における“知”の伝承サイクルには、このオーラル・ヒストリー手法が必要となる。つまり、このプロセスは、伝承者に実際に習いながら、踊りで注意すべきことや所作の名称などの聞き取りをする。このとき同時にビデオをとることである。これらの記録をもとに、分析して基本的なパターンを取り出すことが重要である。

この、オーラル・ヒストリー手法を研究に用いる利点について、東京大学の清水唯一朗氏は、第一に文字資料が存在しない、歴史にとって全く「未知」のを知りうること。第二に、文字資料のみでは知りえない情報を得ることができる点。第三に、聞き手が存在する点。第四に、話し手の人生、価値観などを体系的に把握することが可能。など4つに分類している。

こうした利点を通して、「郡上踊」における

論文受理日：2007年4月11日

*1 HISADA, Yuri: 岐阜女子大学 *2 KUZE, Hitoshi: 岐阜女子大学 e-mail=hitoshi@gijodai.ac.jp

*3 HAYASHI, Tomoyo: 岐阜女子大学, *4 MATSUNO, Koucho: NPO 法人地域資料情報化コンソーシアム

単位映像資料では不可能であった範囲まで広げていくことができるのがオーラル・ヒストリー総体としての利点として挙げられる点である。今回のオーラル・ヒストリーは、郡上おどり保存会の会長である藤田正光氏に、撮影した映像を見ながらインタビュー形式でオーラル・ヒストリーを撮影した。

3. 「郡上踊」と伝統文化の伝承

伝統文化は、歴史のなかで常に同時代性ある文化として現在まで継承されてきた。それはそれぞれの地域の発展と成長とともにその形を創造的に変え、今日に継承されてきている。今回取り上げた国の重要無形民俗文化財である「郡上踊」も同様に、郡上と言う地域の発展と共に創造的に変化しながら今日に継承されてきた民俗芸能である。

従って、この研究は「郡上踊」の歴史的な文化遺産をデジタル・アーカイブしたのではなく、『伝統の先端にいる現在において生活している人が創造している文化』をデジタル・アーカイブしたものであり、地域における民俗芸能の伝承をみたものである。そしてこのような民俗芸能こそが、支援されていくべきものではないかと考える。³⁾

しかし、伝統文化を伝承するためには、伝統文化は地域や生活と密着した文化であるが故に、単なる資金助成は伝統文化には必ずしも良い効果を生むとは限らない。伝統文化における創造と発展、これがそれぞれの地域の個性ある文化の創造であり、地域の創造、活性化の源である。全国のなかでも比較的伝統文化が豊かに継承されている飛騨地区の白山文化が、それらを同時代性ある活動として活性化していくことで、多様で豊かな社会を創りあげることが期待される。

また、本学がそのような地域社会を形成していく活動に対して、適切な形で協働していくとすれば、それは非常に大きな意義を持つものである。

「郡上踊」は、中世の「念仏踊」の流れを汲むと考えられている。盆踊りとしての体裁が整えられたのは、八幡藩主の奨励によるとされる。江戸時代初期の藩主・遠藤氏が領民親睦ため奨励したのが発祥とも、江戸時代中期の藩主・青山氏が百姓一揆後の四民融和をはかるため奨励したのが発祥とも伝えられるが、

定かではない。

「郡上踊」は、郡上節を演奏する囃子の一団が乗る屋形を中心に、自由に輪を作り時計回りに周回しながら踊る。会場が街路の場合もあるので、輪は円形とは限らない。踊りには曲ごとに定型がある。振り付けの基本は簡素なので、初心者や観光客でも見様見真似で踊ることができるようになる。装束は男女とも浴衣に下駄履きが標準的だが強制ではない。踊りへの参加は完全に自由で、飛び入りや離脱に規制はない。通常、見物人よりも踊り手の方が圧倒的に多数である。

「郡上踊」の際に演奏される囃子を総称して郡上節と言う。



写真1. 郡上踊 (かわさき)

「郡上踊」の楽曲には、「かわさき」「春駒」「三百」「ヤッチク」「古調かわさき」「げんげんばらばら」「猫の子」「さわぎ」「甚句」「まつさか」の10曲がある。対応する踊りは、それぞれ異なる。なお「まつさか」は終演の曲目である。囃子の構成は、三味線・太鼓・笛の伴奏に唄囃子・返し言葉・掛け声。伴奏がない曲もある。

また、郡上節が演奏される屋形は、可動式の木造2層寺社風構造であり、永年使用される。開催日毎に会場に移動し、適所に設置される。開催期間以外は八幡町内の専用倉庫に保管されている。

4. オーラル・ヒストリー手法とデジタル・アーカイブ化

民俗芸能の中には、伝承者と被伝承者の距離が離れすぎて、教授がうまくいかないことがある。伝統的な伝承方法はまず「見て覚えて」「まねて覚えて」「繰り返して覚えて」と

いうやりかたであるが、身近に見る機会のない現代の子供達には難しい。といて、新しい教授方法を考案したところで、今度は伝承者の方がそれを活用することができない。そこで両者をつなぐデジタル・アーカイブが必要となってくる。デジタル・アーカイブ化の手順は、まず、踊りの記録を作ることから始まる。次に、オーラル・ヒストリーの作成に取り掛かる。これは、自らが伝承者に実際に習いながら、踊りで注意すべきことや所作の名称などの聞き取りをする。

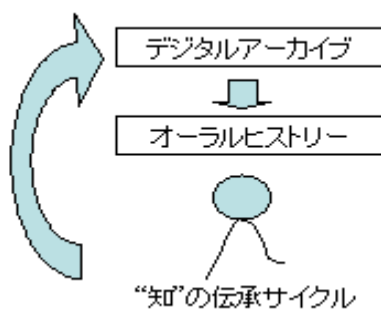


図1. “知”の伝承サイクル

このとき同時にビデオをとる。これらの記録をもとに、分析して基本的なパターンを取り出すことが重要である。

伝統的な教授方法では、いつでも演目の頭から練習するが、デジタル・アーカイブによる伝承は、子供にパターンの練習から始めさせることが可能となる。笛では音のだしのかたのこつや、指使いと音の関係などを飲み込ませてから、やはりパターンを教える。子供のなかに、ある程度蓄積ができてから、演目を教えることが重要である。デジタル・アーカイブはここまでで、それから後は、子供自身がデジタル・アーカイブ化された映像を使って次の世代を教えることが可能である。そして、本当の演目は伝承者から習うことになる。ここまで基本訓練ができていると、伝承者から習うことが可能になる。つまりこのような“知”の伝承サイクルを地域で行うことが、生活の中で芸能を自然と身につけることをしなくなった今日では重要な要素となるのである。⁴⁾

5. オーラル・ヒストリー手法の技術的考察

デジタル・アーカイブにおいて大切なこと

は、なるべく高品位な映像で保存することである。ハイビジョン撮影におけるオーラル・ヒストリー作成における留意事項は次のような点である。



写真2. デジタル・ハイビジョンカメラ

(1) オーラル・ヒストリーの形態

オーラル・ヒストリーは対象の捉え方から前述の清水氏によると、大きく三つに分けることができる。²⁾

第一にライフヒストリーと呼ばれる形態がある。これは対象者の人生全般について聞き取りをする形態であり、社会学の方法として用いられてきた。

第二に、特定のテーマを絞って行うテーマオーラルがある。

第三に、テーマオーラルを発展させた形態として組織オーラルがある。これは一つの組織について網羅的に話を聞いていくことで、組織の全体像、組織の記憶を残し、体系的に把握することを可能にするものである。

今回の「郡上踊」の保存会長のオーラル・ヒストリーは、「郡上踊」というテーマに沿って聞き取りをした。そのために、限られた時間の中でも複数の関係者に話を聞くことが可能となり、クロスチェックと情報の複層化が可能である。

(2) 対象へのアプローチ

分析事項が決まれば、次は聞き取り対象者の選定、アプローチを行うこととなる。テーマオーラルのように課題が先にある場合にはとりわけ聞き取り対象者の選定が重要となる。今回は、先に「郡上踊」を既にアーカイブし、その歴史的な意義や踊りの基本を担当者は熟

知していることになる。

今回のテーマオーラルは、「郡上踊」の伝承が課題であるため、歴史についても踊りの所作についても十分熟知している郡上踊り保存会の会長にお願いした。また、今回のオーラル・ヒストリーを作成するにあたって、何度も事前に顔合わせを行っておいた。このことは、先方からある程度の事前情報（履歴など）を得ておくこと、先方の様子を把握して聞き方を考えることなど、聞き取りを充実したものとするための準備の意味合いがある。

（３）資料、質問表の作成

次に、聞き取り実施に用いる資料と質問表の作成が課題となる。「郡上踊」では、事前に全ての「踊り」を動画で撮影しており、この映像を実ながら、インタビュー形式でオーラル・ヒストリーを作成した。このことは、いずれも記憶の引き出しとして、話の流れを構成する軸となるものである。

（４）インタビューの実施

実施の段階になると、聞き手をどうするかが問題となる。聞き手の人数は、通常、少人数で行うのがよい。これは、質問、視点に多様性を持たせることと同時に、聞き手の集中力の問題がある。一対一の聞き取りの場合、聞き手はどうしても次の話題、話の振りかたに意識が向き、通常のように相手の話を深く理解するほどの余裕を持ち得ない。こちらの聞きたいことだけではなく、相手の話したいことを聞くことが記憶の覚醒には重要となってくる。そして、聞き手が質問表に書かなかった、予想しなかった事例にこそ、大きな発見が存在していることも多い。

（５）書き起こし、修正、追加から公開まで

インタビューが終了すると毎回、録音の書き起こし作業が出てくる。実際のインタビューはそのまま文章化することはほぼ不可能なものであり、これを意味合いを変えず、雰囲気や壊さず再構築するにはかなりの経験を要する。そうして完成した第一次速記録は、聞き手話し手双方に送られ、文章チェック、訂正、修正、加筆、場合によっては削除が入ることとなる。これを受けて第二次速記録が作られることとなる。

いよいよオーラル・ヒストリーが終わると、DVDの作成が考えられるが、その場合には次に示すような情報の複層化をすることが重要になる。また、公開にあたっては著作権等の契約、覚書を取り交わす必要がある。

6. 重要無形民俗文化財「郡上踊」におけるオーラル・ヒストリー

（１）インタビュー

国重要無形文化財「郡上踊」のデジタル・アーカイブ化は、下記のような日程で撮影した。

日時：平成18年10月16日

会場：郡上市総合文化センター

内容：郡上おどり保存会長のインタビュー



写真3. 撮影風景



写真4. インタビュー



写真5. 所作の説明

ここで、「古調かわさき」を例にインタビューの一部を次に示す。

「この踊りは、寛永年間のことでございますけれども、郡上地方の方から伊勢神宮のお参りに行った際に、伊勢の古市というところがございまして、古市というところは、遊廓でございまして、そこで、郡上地方の参宮道者が習ってそれをまた郡上持って帰って、農耕に使ったと。」

「昔は農耕と言いましても田んぼに、草を刈って入れてその入れたときに、その草を田んぼの中に踏み込むわけですけれども、「おあし」という道具がございまして、そのオアシというのは下駄の大きなので、それに紐がついておりまして、それで踏み込むという動作が踊りの仕草になっております。」

「それでこの、踊りのポイントなんでございませぬけれども、まず、第一に田んぼの中にこの足を踏むということは、なかなか抜けきれない、足の運びともう一つは、手の動きですな。手の動きはあまり上に上げないと。大体耳の高さで、止めていただくと。」

「そういったことで、しかもこの踊りはあの、従来の踊りと違いまして、右まわりでございまして、右まわりで踊っていただく、それともう一つは足。これ非常に上がっておるけど、ほんとはあまり高く上げないように踊ってもらうのが一番大切じゃないかと思ひますし。」

「もう一つは、あの、土臭いこれは踊りだもんですから、特にこれが一番最初の踊りということでも、あの、これが四十、昭和四十八年に、国の選定芸能に選ばれたということで、ほんとにこれ、一番郡上踊り保存会、郡上踊りのなかでは、大切な踊りでございまして、なかなか踊りでそのものも素朴に踊るといふのは大変難しいんですけれども、特にこういったことを十分に気をつけていただいて、素朴な踊りをさせていただきたいなと思ひます。」

「なかなかこの表現の足、手足の動かし、同時に手足が動くものですから、なかなかこれ、大変でございませぬけれども、そういったことに十分注意していただいて、とにかく手を上げすぎない、足をあまり上げすぎないようにして、踊っていただくのが、一番大事でないかなあと思ひます。」

「この歌詞なんですけれども、この歌詞も、なか

なか土臭い歌が多いんでございます。ということ郡上独特な節回しと申しますか、こういったけれんみのない節回しとなっておりますので、この節の踊りの節の方も気をつけていただき、さらにはこの踊りを理解していただくには、やっぱり、歌詞をよく理解することでも大切なことかなあと思ひます。」

(2) オーラル・ヒストリーの構成

これらの記録をもとに、分析して基本的なパターンを取り出すことが伝承には重要である。そのために、これらの記録と同時に、静止画や動画と対応させて提示することが必要である。

例えば、「それでこの、踊りのポイントなんでございませぬけれども、まず、第一に田んぼの中にこの足を踏むということは、なかなか抜けきれない、足の運びともう一つは、手の動きですな。手の動きはあまり上に上げないと。大体耳の高さで、止めていただくと。」というインタビューの記録に対して、次のような静止画を並行して提示する。



写真6. 足の所作



写真7. 手の所作

このように、インタビューの記録に対応して、多視点撮影されたデータの中から、ポイントを抽出して提示することが大切である。また、これらの踊りの全体を動画で提示することも必要となる。

また、「このかわさきいう踊りは今の古調かわさきの新版といいますか、もっともこれ今代表的に踊られているわけですけれども、これは、大正年間に、大正三年でございますが、当時の川合村長の戸塚鎌助という方が作詞をされまして、それに、西川倉寿という方が踊りの振り付けをされました。」というような内容に関しては、各種の資料を提示することも必要となる。

7. おわりに

今回は地域の伝統文化に関する“知”の伝承サイクルを支援にその重点が置かれている。その中のコンテンツとしてオーラル・ヒストリーはどのように位置づけられるのであろうか。筆者らは、そもそもオーラル・ヒストリーとは文字資料と同様の情報を提供しつつ、文字資料では伝わらない、いわば隙間を埋めるものであると考えている。漫然とインタビューを行うだけではかかる成果は得られないであろう。この場合、テーマオーラルの形態をとって、事象の連関を意識して質問表を作成し、それに沿って聞き取りを進めることが望ましい。また、教育の観点から見たときには、オーラル・ヒストリーを取ることで自身が、事象に対する興味を抱かせ、具体的なイ

メージを持つ好機になるであろう。大学の授業の中でもオーラル・ヒストリーを取り入れているものが見られるようになってきた。

この研究は、平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の一環として行った研究であり、主に久田由莉と松野光暢が「郡上踊」の研究・調査・資料収集、久田由莉、林知代が「郡上踊」のデータ処理を担当し、久世均が論文のまとめを担当した。この論文・資料の作成にあたっては、岐阜女子大学の後藤忠彦教授の指導によりで行った。

また、郡上おどり保存会の会長である藤田政光氏には撮影の機会を与えていただいたことに厚く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 久田・白木・根本・大澤・張・三宅・谷口・加藤・後藤：文化活動等のデジタル・アーカイブ化のための多方向同時撮影について
日本教育情報学会第22回年会 Aug26-27, 2000, PP246-247
- 2) 清水唯一朗：日本におけるオーラル・ヒストリー
文部科学省学術創生研究, 2002-2006
- 3) 久田・林・松野・久世：文化情報のデジタル・アーカイブの実証的研究[I] 日本教育情報学会 教情研究07 No. 1, 2007, 2, 11 P1-P6
- 4) 久世・久田・林・松野：文化情報のデジタル・アーカイブの実証的研究[II] 日本教育情報学会 教情研究07 No. 1, 2007, 2, 11 P1-P6
- 5) 御厨貴：オーラル・ヒストリー 中公新書 2002. 4. 25